

韓国併合				
出版社	頁	項目名	記述	コメント
大阪書籍	160	韓国併合	<p>日露戦争後、日本は、朝鮮(韓国(注))の外交権をうばい、韓国統監府をおき、さらに内政権もにぎって、軍隊を解散させました。解散させられた兵士は、農民と共に日本に抵抗(義兵運動)し、初代韓国統監だった伊藤博文が、民族運動家の安重根に射殺される事件も起こりました。このような動きに対して、日本は、1910年、軍隊の力を背景にして朝鮮を植民地にしました。これを韓国併合といいます。</p> <p>(注)1897年、朝鮮は諸外国と対等であることを示すため、国名を大韓帝国と改めました。</p>	<p>韓国併合過程が簡潔に叙述されているが、義兵運動や安重根による伊藤博文暗殺と韓国併合とが因果関係となっているかのようように読める。一方、韓国併合に沸き立つ日本の世論と、それに対する違和感を表明した石川啄木の短歌が対抗的に示されているので、韓国併合に対する当時の世情の一部を理解することができる記述となっている。</p> <p>【総論】参照。</p>
	160	【コラム】	<p>石川啄木の短歌 地図の上 朝鮮国にくろぐると 墨をぬりつゝ 秋風を聴く (『創作』1910年) 日本中が韓国併合のニュースにわきかえるなか、詩人の石川啄木は上のようによみました。</p>	
教育出版	132	韓国併合	<p>日露戦争に勝利した日本は、武力を背景に韓国を保護国とし、韓国の外交権をうばって統監府をおきました。そのため韓国では、武器をとって日本と戦う抵抗運動がおこりました。日本は、やがて韓国内政の実権をにぎり、軍隊を解散させました。解散させられた兵士たちは、義兵(注)に加わり戦いました。韓国の安重根が統監府の初代統監だった伊藤博文を射殺するという事件もおこりました。日本は韓国の抵抗をおさえて、1910(明治43)年、韓国を植民地とし(韓国併合)、韓国を朝鮮とあらため、朝鮮総督府をおいて支配しました。</p> <p>(注)朝鮮で反日をかかげ武装して戦った民衆。</p>	<p>日本の韓国併合過程が簡潔に、また必要最低限の事実を挙げながらまとめられている。</p>
清水書院	168	日本の植民地支配	<p>韓国に関しては、欧米の強国の支持をえうえで1905年に保護国とした。外交権をうばい、統監をおいて内政の監督もはかった。これに対し、韓国民ははげしく抵抗し、独立運動家安重根が初代統監の伊藤博文を暗殺した。その翌1910年、日本は韓国併合を強行した。</p>	<p>韓国併合過程で、朝鮮民衆の抵抗には言及するものの、日本が朝鮮民衆を徹底的に武力弾圧したことについては触れられていない。</p> <p>他の教科書と比べ、韓国併合過程に関する記述が相対的に少ない。</p> <p>【総論】参照。</p>

帝国書院	174	韓国併合	1905年、日本は韓国を保護国としたうえで、伊藤博文を韓国統監として派遣し、内政・外交とも日本の支配下におきました。そのため、韓国では激しい抵抗が全土に広がり、伊藤博文が暗殺される事件もおきました。1910年、日本は韓国を併合して、植民地としました(韓国併合)。朝鮮総督府において支配を開始し、韓国を朝鮮と改め、首都漢城(現在のソウル)も京城と名をかえさせました。日本の支配に対する朝鮮民衆の抵抗は、その後も続けられました。	韓国併合過程についての説明は決して詳しいものとは言えないが、韓国併合とともに、国号を韓国から朝鮮へ、首都名を漢城から京城に変えさせたと言及は教出・日文を除く他の教科書には見られない工夫である。 啄木の短歌を取り上げる教科書が多い中で、寺内の短歌と対照させる試みは、圧倒的多数の日本人が韓国併合を受け入れたという前提を踏まえさせた上であれば、当時の言論の中からその賛否を複眼的に読み取らせることが可能となるのではないか。 また、ある歴史的人物について、日韓それぞれの見方を提示する記述は、歴史観を多角的にする試みとして評価できるのではないか。
	174	【コラム】韓国併合についてのうた	初代朝鮮総督のうた 「小早川・加藤・小西[*秀吉の命令で朝鮮に出兵した三人の大名]が世にあらば今宵の月をいかに見るらむ」 石川啄木のうた 「地図の上 朝鮮国に黒々と 墨を塗りつつ 秋風を聴く」 上の二つのうたが、どのような気もちでうたわれたのかを考えてみよう	
	175	【コラム】国際韓国の教科書に見る安重根	安重根は、伊藤博文を射殺したため、日本では暗殺者とされていますが、韓国では民族的英雄であり、朝鮮民族のために独立運動を行った人物として尊敬されています。そのため、韓国の教科書でも次のようにとりあげられています。「安重根は、韓国侵略の元凶である伊藤博文が、大陸侵略についてロシア代表と交渉するために、満州のハルビンに来たところを射殺した。安重根のこの行動は、日本の侵略に対するわが民族の強い独立精神をよく表したものである。」	
東京書籍	160	韓国の植民地化	日露戦争のさなかから、韓国は、日本による植民地化の動きにさらされていきました。1905(明治38)年には外交権がうばわれ、1907年には皇帝が退位させられて、韓国内政は韓国統監府ににぎられました。このため国内では民族的抵抗運動が広がり、日本によって解散させられた兵士たちは、農民とともに立ち上がりました。これは日本軍によって鎮圧されましたが、日本の支配に対する抵抗は、その後も続けられました。 1910年、韓国は日本に併合されました。日本は、朝鮮総督府を設置して、武力を背景とした植民地支配をおし進めました[注:土地制度の近代化を名目として日本が行なった土地調査事業では、所有権が明確でないとして多くの朝鮮農民が土地を失いました。こうした人々は、小作人になったり、日本や満州へ移住することを余儀なくされたりしました]。学校では朝鮮史を教えることを禁じ、日本史や日本語を教えて、日本人に同化させる教育を行いました。	日露戦争と朝鮮植民地化との関連性に言及している点は、日露戦争の目的を理解させる上でも評価できる叙述である。しかし、「韓国統監府」の記述が唐突なので、これが日本の対韓植民地統治機関であることが理解できない。また、他社の多くが記述する安重根について言及していない。一方、全教科書中、唯一、韓国皇帝を譲位させたことについて言及している。 【総論】参照。
日本書籍 新社	162～ 163	韓国併合	日露戦争後、日本は韓国に圧力を加えて外交権をうばい、韓国統監府という役所において韓国の国内の政治も支配した。さらに、軍隊も解散させた。このような日本の侵略に対して、朝鮮の民衆は武器をもって各地で立ち上がり、義兵運動などをおこして、はげしく抵抗した。1909年には、朝鮮の独立運動家安重根が、初代韓国統監であった伊藤博文を、満州のハルビンで射殺した。日本は、日本に対する抵抗運動を軍隊の力でおさえた。そして、1910年、日本の軍隊が警戒するなか、韓国皇帝に国をおさめる権限を日本にゆずる条約に調印させ、韓国を日本の領土に併合した(韓国併合)。	日本の対朝鮮政策を明確に侵略と位置づけている点は、他の教科書が評価を曖昧にしているだけに、評価されうる部分である。韓国併合過程について簡潔にまとめている。 【総論】参照。

日本文教出版	140	韓国併合	日露戦争後、日本は韓国を保護国とし、統監府において、内政の実権をにぎり、韓国の軍隊を解散させた。韓国の人々は、日本の支配に抵抗して、各地で義兵闘争をくり返した。そうした中、安重根が、初代統監の伊藤博文を、満州のハルビンで暗殺した。日本は、反日抗争を軍隊と警察の力でおさえ、1910(明治43)年、韓国を日本の領土に併合し(韓国併合)、朝鮮とよんで、植民地として支配した。朝鮮の人々は、祖国を失い、同化を強制され、満州や日本への移住を余儀なくされた。	植民地となって祖国を失ったこと、満州や日本への移住を余儀なくされたことの因果関係が明確ではないので唐突な感がある。具体的な事実を挙げるなどの工夫が必要であろう。なお、安重根を「救国の英雄」と評価するのは韓国においても一般的であろうか。 【総論】参照。
	140	【写真】安重根	「救国の英雄」とされ、韓国のソウル南山に記念館が建てられている。	
扶桑社	170～171	韓国併合	日露戦争後、日本は韓国に韓国統監府を置いて支配を強めていった。欧米列強は、イギリスのインド、アメリカのフィリピン、ロシアの外モンゴルなど、自国の植民地や勢力圏の支配を日本が認めることなどと引きかえに、日本が韓国を影響下におさめることに異議をとなえなかった。 日本政府は、日本の安全と満州の権益を防衛するために、韓国の併合が必要であると考えた。1910(明治43)年、日本は、武力を背景に韓国内の反対をおさえ、併合を断行した(韓国併合)。 韓国の国内には、民族の独立を失うことへのはげしい抵抗がおこり、その後も、独立回復の運動が根強く行われた。 韓国併合のあと置かれた朝鮮総督府は、鉄道・灌漑の施設を整えるなどの開発を行い、土地調査を開始し、近代化に努めた。しかし、この土地調査事業によって、それまでの耕作地から追われた農民も少なくなく、また、日本語教育など同化政策が進められたので、朝鮮の人々は日本への反感を強めた。	外交権の奪取(保護国)の記述がなく、併合と統監府の関連性について誤解を与えるおそれがある。韓国併合過程において、帝国主義国間の取引状況に言及することは確かに重要であるが、朝鮮内での動きについての言及がとぼしい点に問題がある。 【総論】参照。